

令和 2 年 度

第 10 期

(令和 2 年 4 月 ~ 令和 3 年 3 月)

事業報告書



NPO法人

丸亀街づくり研究所

<https://www.machilabo.or.jp>

令和2年度 第10期 事業報告書

目 次

1. 令和2年度 NPO 法人 丸亀街づくり研究所 事業報告
2. 令和2年度 NPO 法人 丸亀街づくり研究所 決算報告
3. 令和2年度 若者独立塾 丸亀おひさま荘 事業報告
4. 令和2年度 アフターケア事業所 わっかっか 事業報告
5. 令和2年度 自立援助ホーム nature 事業報告

1. 令和2年度 NPO法人 丸亀街づくり研究所 事業報告

① 経営方針評価

1. 商品・市場・サービスの事業展開についての方向と目標

【事業の方向】

社会的養育において、一時保護から入所、そして、退所後のあらゆる年齢の利用者の自立支援を行う。

（評価）一時保護の機能が強化された事によって、あらゆる年齢の利用者が利用することになった。その自立支援において3つの事業所によるそれぞれのアプローチを行った。一時保護から解除後に退所後支援につながる事ができた。それぞれが一つの流れとなり、連携や協同することに関してはさらなる向上が課題になってくる。

【事業の目標】

① 一時保護の機能を強化しつつ、二つの自立援助ホームが協働して自立支援にあたる。

（評価）一時保護の機能については昨年より増加し、強化されてきた。二つの援助ホームの協働は部分的であり、スタッフの人数的に精一杯な部分があった。

② わっかつかは、高松事務所を中心に県内全域の施設退所者支援のさらなる充実を図る。

（評価）たかまつにおいてサロンを展開するなど、わっかつかの本所として高松地域の利用者を中心に利用が増えたことは充実してきたと思う。西は観音寺、三豊から東は出前講座の恵愛の東かがわ市まで全域を網羅してきている。退所者の登録数が増加してきているが、実際の利用の実人数との差が広がっているところに実態の把握など今後の課題がでてきている。

2. 働きがいのある会社づくり（社員の幸福追求）

① スタッフやスタッフの家族の健康や幸せと自社においての目標が達成できるようやりがいのある仕事づくり、将来設計できる待遇、年間休日5日増加、安心して休暇制度を利用できるよう二人体制をとることなどワークライフバランスに取り組む。

② 全スタッフが科学性、社会性、人間性を深め、法人に還元できるように、ラボチームを設けて自己研鑽に取り組むしくみを創る。

③ それぞれの部署が経営理念の実現のために切磋琢磨しあえる関係の中で、一時保護から入所、退所後も継ぎ目のない支援を行い、お互いの支援の質を高め続ける関係を構築する。

（評価）新年を迎えて個人目標を設けた。仕事のやりがいやワークライフバランスについての課題はどれもクリアできておらず、今後大きく課題が残る。ラボチームに関してはそれぞれにおいて活動に取り組んだ。それをもとに実働の委員会制度に繋げていきたい。3つの事業所がお互い支援の質を高める関係に関しては今後も法人スタッフ会などを活用していきたい。

3. 企業の社会的責任（地域社会、環境への対応）

① 制度のはざままで困っている人の悩みを聞き、共に解決していくことで住み心地のよい街づくりに取り組む。

② 子どもと関わる人達が安心して共に育ちあい、また、自立していく為に地域にたくさんの心の拠りどころをつくることで、地域全体で共に育ち合うよい地域社会をつくる。

③ 地域の中で安心して子育てできるサービスや見守り体制を充実させて、社会的養育を必要とするニーズを解消する。

（評価）制度のはざままで困っている悩みなど聞く事が増えてきた。一つ一つのそれらを解決までは至らなくても真摯に向き合っていくことが大切だと言える。地域にたくさんの心の拠りどころに関しては今後も課題だと言える。地域の中でのサービスについてはショートステイなどが考えられるが、コロナ禍で他の施設が受け入れをしない状況の中で、観音寺から綾川、高松まで広域での利用が広がった。

（全体を通して）

経営方針や経営評価の総評としてはできたこととできなかったことがはっきりと分かれ、視覚化された事は大事ではないかと考える。また、方針や計画そのものが即しているかどうかとも課題が残る。その中で、法人として「いのちに寄り添い心をつなぐ」ために、どのように方針や計画を明確化、具体化し、実行していく事こそ大きな課題である。

② 経営計画評価

		R2 年度経営計画	評 価
経営目標		県内の地域格差を埋める事業で、香川の福祉の発展に貢献する。	一時保護・入所・アフターとそれぞれの事業で貢献してきた。利用者数が昨年度より増えている。地域格差という点では一保の人数の受け入れ母数が増えている訳ではないので、まだ努力が必要だと思われる。
各期間における経営目標達成の基本方針 (どのように目標を達成するか)		利用者のニーズをしっかりと受け止め事業の展開を模索していく。 スタッフの支援の質の向上を図り、地域に対してPRしていく。	事業の展開の模索としては利用者増加に伴う定員改定を次年度にむけて実行して行きたい。 PRに関してはHPを作成し、パンフレットも新調できた。質の向上に関しては内部研修のみならず、外部研修をどう内部にしっかりと還元していくかが課題である。
①利用者 利用者満足の上への改革方針	利用者対応	利用者の意見を支援に反映できる仕組みをつくる。	意見をスタッフ会で検討するなどをしたが、仕組みとまではいっておらず個々のそれぞれへの対応になった。
	利用者との結びつき	・切れない信頼関係を構築する。 ・ピアカウンセリングを支援する。	切れない関係の定義が難しいが、各事業でそれぞれ関係性を深めてきたと思える。 ピアカウンセリングに関しては退所者同士や入所者との関わりをもつ場面はあったが、あえてカウンセリング的にするというより自然の関わりの流れに委ねている部分があった。
②業務プロセス 支援・サービス・対象創造への改革方針	新支援・新対象開発	部署間の横のつながりを深め、新たなサービスを生み出す。	一時保護からのわっかっか利用などを兎相と連携したが、利用までは至っていない。横のつながりからスタッフの増員の必要は見えてきた。新たなサービスの部分と法人内での連携強化の部分という二つの視点が必要になってくる。
	業務の見直し・設備投資	経営理念・事業理念に沿って、教養と判断する力を身につける。	理念と照らし合わせて考える機会が、教養と判断する力を身につけることにつながっている。その力の部分に関しては今後も継続して考えていく事が必要となってくる。
	他社との連携	県内外の協議会活動を深め、社会的認知の改善と向上を行う。	自立援助ホームの県、四国、全国の活動やアフターのえんじゅ、同友会などの活動、SNSの発信などで社会的認知の向上を図ってきた。誰にどう知ってもらう事が必要なのかを精査していく事が必要と感じる。
③学習・成長 人材共育の改革方針	人材採用	運営状況に応じた採用を行う。	2名の退職に伴い、2名の増員を行った。退職後にすぐに採用に至る事はできなかった。おひさまに関して一人体制が厳しいところで採用の必要性があったが、できていない。実習やアルバイト等での採用に繋がる仕組みづくりが必要となってきた。
	社員教育	研修の参加をうながし、自己研鑽をする。スタッフ全員が学びを共有し、人間性を深めていく。	自己研鑽を個々に取り組む姿勢があり、素晴らしい。そのバックアップを法人でどう行っていくか課題が残る。法人スタッフ会やラポチーム等で学びを共有し、人間性を深めてきたがそれ以外の相互交流等は必要になってくると感じる。
	教育カリキュラム・時間	・OJT研修で自己研鑽を図る。 ・資格取得の時間を設ける。	OJT研修に関しては今年度採用スタッフを中心に実施を行い、自己研鑽を図ってきた。 個別に実施する部分も大事ではあるが、複数で取り組む事は今後も必要だと感じる。
	労働条件改善	・年間休日を3日増やす。	昨年度と同じ休日の数となり、年間数を増やすことができていない。有休休暇もいつでもとれる環境でないところから課題が残る。

④財務 業績向上・財務強化・営業に関する方針と目標	業績向上	売上を4,600万円にする。	収入を目標額にする事はできた。自立支援担当職員の配置による加算の後押し部分も大きい。
	財務強化	・natureの運営の安定化を図る。 ・わっかっかの事業収入を増やす。	natureに関しては設立2年目という事があり、定員払いで安定している。暫定定員が適用される次年度に向けては入所児童の数の安定が求められる。 わっかっかに関しては、今年度より700万となり収入が増えた。自己努力で売上を伸ばすものではない中、自己財源の中で収入を増やす為の実績作りや先行投資を行わなければならない部分がどの事業にも共通していえる課題である。
⑤良い企業文化	経営理念の共有	経営指針書を常に携行して、指針書の使い込みを実践する。	スタッフ会で読み返す事などをして使いこむように実践を行った。しかし、経理面などの分かりにくい部分を共通して理解しておく事は今後の課題となる。
	全員参加の経営	経営指針書の中身の理解を深めながら、労使関係を構築する。	事業別とラボチームとで指針書の中身の理解を深めてきた。それと労使関係がイコールとはなっていない為、その部分をイコールにする取り組みや社風づくりは必要となってくる。

③ ラボチーム評価

《科学性》

(目標)

利用者もスタッフも1年後の自分はどうなっている。→この内容に即した行動はできなかったように思われる。法人全体のお金の流れ→タイガーマスクを中心に内容を知れて、全体で共有できた。いただいた助成金をスタッフ会で共有できたのでよかった。

(ビジョン)

科学性のビジョンはこれからもずっと続けていくものとなっているので、到達度として計測評価することは難しい。

(活動内容)

- ① フードバンク→ハローズに子どもと一緒にいけることが多くありがたく有効活用できた。生鮮食品のロスなどはないか聞いてみたが、そこに関しては食中毒などの危険性があるとのことで断られた。全体としてできることがあるのかは精査が必要。
- ② タイガーマスク→内容が把握できてよかった。来年度の課題として今後の運用方法を検討していく。(退所時の餞別・利用者への援助金など)
- ③ ホームページ・パンフレット→今後の運用については検討課題。
- ④ 助成金→コロナの影響で多方面にだけた事に感謝。有効に使っていききたい。事業所ごとの運用で、どう科学性として絡んでいけるのかは課題。
- ⑤ フリマ→他団体の企画のブースに出店する提案は可能。各事業所のロゴマーク、彦坂さんが描いてくれた絵でステッカーなど作りたい。

(総評)

科学性としてはパンフレットの改定とホームページが完成という成果物としてあげられるのでよかったと思う。運用に関しては今後の検討課題であり、継続して管理していくことが求められるのではないかと感じている。また、日々の業務と平行しながらの両立も課題である。法人職員、その家族への慶弔見舞金などを互助会的な仕組みを作る。科学性の中での役割分担、定期的にミーティングも行っていきたい。各事業所への割り振り(通信、ホームページの更新など)精査が必要。利益の追求→利益とはお金だけではない。

1年間を振り返り、来年度にむけて何ができるか、何が必要か、何が不必要か再度考え来年度につなげていきたい。

《社会性》

（目標）

- ① バイトを紹介する事が出来たのが1件で外に出る事が出る事が少なかった。
- ② 赤い羽根共同募金に参加できることが出来たが回数を増やす必要がある。

（ビジョン）

- ① nature では自治会に加入でき挨拶や近所の方に顔を覚えてもらうことができた。
- ② 各施設では料理や食事は出来たが合同ですることができなかった。
- ③ 自治会の行事はコロナで中止になり参加できていない。
- ④ バイトの紹介をする事が出来たのが1件だが3カ月継続している

（活動内容）

- ① nature では自治会に加入することができた。
- ② バイトの紹介をする事が出来たのが1件だが3カ月継続している。
- ③ 赤い羽根共同募金に参加する事が出来たが1回だけだった。
- ④ コロナで軒並みイベントが無くなり参加できなかった。

（総評）

コロナ化で外に出ることができなかった事が多くバイトの開拓訪問も断られたりする事があった。
募金活動に参加し寄付金をいただくことができた。
避難経路の作成、各事業所の災害時避難場所を作成した。
各事業所で食事会や買い物からの料理をする事が出来たが合同ですることが出来なかった。

《人間性》

（目標）

法人研修の後で食事を囲み団らんの時間を設けた。しかし作る、食べる、片付け、事業所毎に分かれる。終わり…という印象があり、もう少し余裕のある時間配分や何の為に実施しているのか、「やらされている」のではなく、開催される理事長の思いを汲んで欲しいと感じた。事業所ごとにランチミーティングを実施したが、数回も満たないまま実施できなかったため、率先して勤務に組み込んでいきたい。

（ビジョン）

何が正解か不正解かはわからない。しかし、私たちが支援していることに無駄は無いと思う。無理と思うほど手を掛けてあげたいし、一人ひとり時間は少ないが、関わっていく事が少しでも「安心、安全な生活」を送る事が出来るだけで子ども達は安堵するのではないだろうか。成果が直ぐに見えるわけでもないから支援者側としては思いと現実の食い違いがあり、本当に大変な所がある。

（活動内容）

三食の朝、昼、夕と毎食に経費を十分に使い、栄養面からの工夫。野菜の不足分をどう補うか。朝の食事の提供が少し物足りなかった。全体の食事会、事業所での食事会ランチミーティングを実施したが、コロナ禍もあり積極的に実施する事が難しかった。一人勤務が多いため、LINE 電話を使用し、引継ぎ時間で会話をした。

（総評）

今年度は人間性として、法人の中で何が足りていないかの模索をしてきた。現場の声を聴いてみるとスタッフの思いの食い違いから始まっているように感じた。一人一人違った見え方や思いも違い、三者三様の考えがあるため、少しでも相手の伝えたいことに「なんでこう思うかな？」と少し耳を傾け、気持ちを汲むこと、相手を思いやる力をお互いに養って欲しいと思う。また日々の業務に追われ、スタッフ間の交流という機会も少ないため、ランチミーティングを活用し普段から気兼ねなく話ができる関係性を構築していきたい。

2. 令和2年度 NPO法人 丸亀街づくり研究所 決算報告

① 貸借対照表 (2021年3月31日現在)

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
I 流動資産		I 流動負債	
現金及び預金	23,738,754	預り金	214,350
未収金	12,961,423		
郵便為替	383,756		
流動資産合計	37,083,933		
II 固定資産		流動負債合計	214,350
(有形固定資産)		II 固定負債	
車両運搬具	291,998		
その他		固定負債合計	
(無形固定資産)		負債合計	
その他		資本金	
固定資産合計		繰越利益剰余金	37,161,581
III 繰延資産		純資産合計	37,161,581
資産合計	37,375,931	負債・純資産合計	37,375,931

② 損益計算書 (2020年4月1日～2021年3月31日)

(単位：円)

科 目	金 額	金 額
売上高	67,658,792	
売上原価	3,563,570	
売上総利益		64,095,222
販売費及び一般管理費		
給与、賞与、雑給	31,448,743	
法定福利費	3,760,928	
地代家賃	5,304,633	
水道光熱費	1,143,527	
通信費	724,514	
その他一般管理費	5,285,976	
一般管理費計		46,943,807
営業利益		17,151,415
営業外収益		
受取利息		
雑収入		
営業外収益合計		
営業外費用		
支払利息		
雑支出		
営業外費用合計		
経常利益		17,151,415

③ 第10期の決算について

売上に関して、natureが2年目に入り、一年間分の措置費が入ったこと、わっかつかの委託費が増額したこと、また、2施設に自立支援担当職員加算がついた事が大きい。その為、経営計画の目標数値より大幅な売上を達成している。今年度の売上をキープしながらも措置費、委託費以外での収益を増やす事が求められる。また、運営に見合ったスタッフの確保も今後の課題である。

3. 令和2年度 若者独立塾 丸亀おひさま荘 事業報告

○ 利用実績

- ・自立援助ホーム：入所者：1名（R3.3.31時点） 令和2年度：入所者1名、退所者1名
- ・一時保護：66名
- ・ショート：69名

（全体を通して）

安心安全で過ごし易い環境づくり、年齢に合った関わりを心がけてきたが、対応に難しさを感じられた。十人十色それぞれ抱えているものが違う中、正解は無く、これで良いのかと自問自答する日々だったように思われる。一人で抱え込まず寄り良い方向に進む為には、スタッフ間の協力が大切だと思った一年だった。

また、学習面では学校から離れることで学習が遅れてしまうのではと思われ、試行錯誤したがなかなか思うようにならなかった。

入所中の利用者はコロナ禍で色々支障が出てきたが、少しずつではあるが、自分で考え行動できた年だったように思われる。今後課題も多々あるが一つずつ進んで行けるように関わっていけたらと思う。

4. 令和2年度 アフターケア事業所 わっかっか 事業報告

○ 第10期利用実績

登録者数 83名（R3.3.31時点）

種類別相談件数（ ）は前年度比）

LINE 3450件（1.50）、電話 653件（1.52）、訪問 929件（1.48）来所 396人（3.53）、

退所前児童訪問相談対応件数 494件（1.60）

（全体を通して）

昨年度末に今年度、児童養護施設を退所する人は少ないと予想を立てていたが、1年を通して新たに34名の方が登録をしてくれた。34名の中には県外から香川県に来た方もおり、ご縁があって当事業所は彼らとつながることができた。それに伴い相談件数も前年度を超える数となっている。特に来所者数は前年度の3倍になっており、わっかっかたかまつを拠点に活動することで、よりどころとして認知されてきていると考えることができる。

相談内容としては新型コロナウイルスの蔓延に伴い、健康に関することや就労に関することが多かった。社会的にみても少しの体調の変化にも不安な気持ちに襲われるような時期を過ごした。一人であればなおさらであり、母子家庭においても大きな不安に陥る1年だった。若年層の就労においては、例年の就労のしづらさに増して、コロナの影響で面接に至ることのできない会社さんも多く、わっかっかの利用者もそのあおりを受けている印象があった。

退所前支援においては、県外へ進学する子がおり、県外のアフターケア事業者とオンラインで情報交換や本人を交えての顔合わせを行うことができた。県外に行ってもアフターケアとして関わってくれることの安心感を得られることができ、わっかっかも県外からくる方に対してそうありたいと感じた。

日々、がむしゃらに活動してきたが、目の前の一人一人、一瞬一瞬を丁寧にできてきたかは疑問が残るところであり、いかにして向き合うか、わっかっかが彼らに対してどうあるかはこれからも自分たちに問い続けながら活動していかなければいけない。

5. 令和2年度 自立援助ホーム nature 事業報告

○ 利用実績

- ・自立援助ホーム：入所者：4名（R3.3.31時点） 令和2年度：入所者2名、退所者1名
- ・一時保護：1名

（全体を通して）

令和2年度を振り返る事により、どの児童においても新しい環境に飛び込みトライアンドエラーを繰り返し成長した1年であった。nature入所・高校入学・就職・就労支援など、環境の変化を受け入れてきたように思われる。コロナの影響で生活に制限があったが、日々たくましい姿も見ることができるようになった。

また、人に優しくするようにと常に口にしてきたが、気がつけば相手を思いやる気持ちが芽生えていたように感じている。ある児童から「本当の家族じゃなくてもnatureのみんなを家族のように思っている。」という言葉が聞けた事は、natureにとっての財産が増えたようで大変嬉しく、これからもがんばっていける力を与えられた。

来年度は子どもとの関わり、日々の生活を丁寧に扱っていく、感謝の気持ちを忘れない事により、子どもとスタッフの関係性、スタッフ同士の関係性もよりよいものとなるように努めていきたい。